本　城　先　生

中　川　久　定

決断する魂，あるいはむしろ決断し行動する魂というものがあるであろう。『自伝』におけるベンヴェヌト・チェッリニのように。たとえば，ベンヴェヌト16歳，弟14歳のある日曜日の暮れ方。「弟がサン・ガッロの門とボルタ・ア・ピンティとの間に行ったとき，たまたま20歳前後の若者と決闘をはじめた。双方とも刀を帯びていた。ところが弟は激しく斬りたて，相手に一太刀浴びせたので，それに乗じ遮二無二攻め立てた。ぐるりにはたくさんの人が寄りたかっていて，中には敵の親戚もいた。身内の者どもは危うしと見るや投石器に手をかけたが，その一つの石が弟の頭にあたった。弟は失神して地に倒れた。ちょうどそのとき私はそこを通りかかったが，仲間もなく武器も持っていなかったから弟の側に寄り，もう良い十分だ，遁げろと叱るようにいった。ところが都合のよかったことには，前にいった通り，弟は死んだように倒れていたので，私はすぐさま傍らに走りよって刀を取り，数人の刃に囲まれて石の雨を受けながら，弟の傍らに突っ立ち，彼のそばを微塵も動かなかった。その内数人の元気な武士がサン・ガッロの方からやって来て……」（黒田正利訳，現代思潮社）　ひとつの決断は直ちに行動を呼び，行動はたちまち次の決断をうながす。ベンヴェヌトの生涯は，この決断と行動のリズムのなかを流れていく。

けれどもまたこのルネサンス人とは逆に，無限の反省と逡巡のうちにあって行動への出口をはばまれた魂というものも存在するであろう。『日記』のなかのアンリ・フレデリク・アミエルのように。たとえば1860年11月2日の日記。この時ジュネーヴ大学教授アミエルは，すでに39歳である。「脆い私の意志は，羚羊のようにすべてを恐がる。実行を避け決議決定を下さずに済めば，私は何でもしよう。犠牲を供しないために私は断念する。自分を守らないために私は自分を憎む。負けないために権利を放棄する。運命に手懸りを与えないために私は身を縮めて数学的点となる。いやな有様をしないためにいっそ無くなろうと努める。［……］ただ私には勇気の欠乏が私の懐疑の起源であるのか，疑惑が私の落胆の父であるのかわからない。個性の出発点『飛躍点』には自発的な力，不明ではあるが勢のいい意志の行為がある。

反省が私のうちの本能と意志とを殆んど絶滅させてしまった。」（河野与一訳，岩波文庫）

「脆い私の意志」とアミエルはいう。しかし，このいい方は必ずしも正確ではないだろう。彼の意志は決して脆くはなく，むしろ強靭でさえある。ただ，外にあふれ出ることがはばまれているにすぎない。はばまれた意志が，無限の逡巡の過程を意識し，その意識そのものをエロス化し，享楽している。「今私は自分のみじめさを解剖して，憤懣よりも快感を覚えているというのが事実である」と彼はいう。

私がはじめて本城先生からフランス語の授業を受けた約30年前から，先生の姿は，私にとっていつも幾分かアミエルのイメージと重なって見えた。本城先生とアミエル？と先生に親しい学生諸君は恐らく反論することだろう。いうまでもなく，違いは歴然としている。――本城先生のうちにある，学生ひとりひとりに対するあの自己犠牲的な無限の思いやり。だがエゴチスト・アミエルの『日記』の任意のどの1ページを開いてみても，学生に関するただ1行の言及すら見いだされないであろう。愛情深い伴侶にめぐまれた本城先生。しかしアミエルのうちにあるのは，決して実行の次元に飛躍することのない，そして決してパニュルジュ的爽快さを伴なわない結婚生活可否論の無限反復である。さらにまた，しばしばアミエルを襲い，聖霊の訪れのように彼の魂を畏敬と至福の念で満たした宇宙との融合の感覚。このような超日常的恍惚の瞬間が本城先生のうちに到来したということを私はきかない。

けれども，それにもかかわらず，本城先生は私にとって，いつもやはりアミエルであった。尽きることのない自己反省と，その誠実な苦しみの無限の反復という形において。

1960年代の末期に，世界の高度資本主義国を席捲した学生叛乱の以前なら，――そして少なくとも日本の国立大学においてなら――チェッリニもアミエルも，ともに充分に生息することは可能であっただろう。しかしそれ以後急速に近代化してきた――いうまでもなく官僚化してきた，という意味であるが――大学という組織体のなかにおいて，その教員はチェッリニでもなく，アミエルでもないことを，いわば force des choses によって強いられている。

そこから本城先生の苦しみと，それと同時にその苦しみに共感する多数の学生にあれだけ深い愛情をもってしたわれるという喜びとに満ちた10年間が流れていったのであろうと思う。

誰もがいうことであるが，本城先生の面影は，先生のご専門であるロンサールの

顔に似ている。あの月桂冠をいただいたロンサールの顔に。先生にとってこの月桂冠は，しかしながら同時に荆冠でもあったろう。だが，月桂冠が荆冠であり，荆冠が月桂冠であることを，本当に理解し，その喜びと苦しみを本当に味わわれたのはやはり本城先生おひとりであるのだろうと思う。

本城先生，長い間ありがとうございました。